Southampton Nostalgia Scale 日本語版の作成^{1,2}

長峯 聖人³ 外山 美樹 筑波大学

Developing the Japanese version of the Southampton Nostalgia Scale

Masato Nagamine and Miki Toyama (University of Tsukuba)

Nostalgia is a sentimental longing for a one's past. It is an emotion that is known to contribute to multiple adaptabilities. We conducted three studies to develop the Japanese version of the Southampton Nostalgia Scale (SNS), which assesses how often people experience nostalgia on a daily basis. Study 1 indicated that the factor structure of the Japanese version and the original version of the SNS are similar and that the Japanese version of the SNS has acceptable test-retest reliability. Study 2 revealed that the factor structure of the Japanese version of the SNS is stable regardless of age. Finally, Study 3 showed that the pattern of correlational relationships of the Japanese version with explicit variables is similar to the original version of the SNS. These results indicate that the Japanese version of the SNS has acceptable validity and reliability.

Key words: nostalgia, trait nostalgia, Japanese version of the Southampton Nostalgia Scale (J-SNS).

The Japanese Journal of Psychology

2019, Vol. 90, No. 4, pp. 389–397

J-STAGE Advanced published date: September 20, 2019, <https://doi.org/10.4992/jjpsy.90.18206>

記憶とは、自身が経験してきたものの表象である。そのため、自己に関する記憶である自伝的記憶は、アイデンティティの確立につながる (Rubin, Rahhal, & Poon, 1998)。特にアイデンティティの形成が課題である青年期においては、自伝的記憶の役割が非常に大きいことが明らかになっている。

Nostalgia とは

自伝的記憶に関連した概念として、nostalgia がある。この概念は、“a sentimental longing for one's past”として定義されており (Sedikides, Wildschut, Arndt, & Routledge, 2008)、過ぎ去った日々に対するアンビバレントな感情のことを指す (Hepper, Ritchie, Sedikides,

& Wildschut, 2012)。

Nostalgia は非常に複雑な概念であると指摘されることが多いが、その複雑な概念構造を解明しようと努めた研究に Hepper et al. (2012) がある。Hepper et al. (2012) はプロトタイプ・アプローチを行い、nostalgia のプロトタイプとして 18 の中心特性語と 17 の周辺特性語があることを明らかにした。中心特性語としては「記憶」、「回想」、「子ども時代」、「個人的意味」、「過去へ戻りたい気持ち」、「古き良き思い出」などがあり、周辺特性語としては、「白昼夢」、「願望」、「ホームシック」、「穏やか」、「寂しさ」などが挙げられることが示されている。これらの結果から、nostalgia は自伝的記憶と非常に関連が強いことが分かる。

素朴理論から考えると、nostalgia のように過去を回想するという体験は高齢者など、より長く生きている個人において起こりやすいと想定される。しかし、過去を振り返るという行為は自分自身を見つめなおすことであり、自己形成において非常に重要な役割を担っている (Conway & Pleydell-Pearce, 2000)。したがって、nostalgia は老年期だけでなく青年期においても生じやすいと指摘されている (Davis, 1979; Sedikides, Wildschut, & Baden, 2004)。実際に Wildschut, Sedikides,

Correspondence concerning this article should be sent to: Masato Nagamine, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tennoudai, Tsukuba 305-8572, Japan. (E-mail: mas.ngmine@gmail.com)

¹ 本研究の一部は日本心理学会第 81 回大会およびパーソナリティ心理学第 27 回大会にて発表された。

² この研究は科学研究費補助金 (課題番号: 17J00831) による助成を受けた。

³ 日本学術振興会特別研究員

Arndt, & Routledge (2006) は、青年期の個人が平均して週に 1 回程度 nostalgia を経験することを示している。

Nostalgia の機能

これまでの先行研究で、nostalgia は数多くの適応的な機能を持つことが実証的に示されている。特に主要な機能として指摘されるのは、「顕在的・潜在的自尊感情の向上」(Baldwin & Landau, 2014), 「人生に対する意味づけ」(Routledge et al., 2011), 「他者からのソーシャルサポートの知覚」(Zhou, Sedikides, Wildschut, & Gao, 2008) の 3 つである。この 3 つにポジティブ感情の生起が加わった 4 つの機能は、nostalgia が持つ代表的な機能として挙げられている (Hepper et al., 2012)。

しかし、こうした主要な機能以外にも、nostalgia は多くの機能を有している。例えば nostalgia が喚起されることで、ストレスに対するコーピングとして機能する (Batcho, 2013), 向社会的行動が促進される (Stephan et al., 2014), well-being が向上する (Baldwin, Biernat, & Landau, 2015), 社会的コンピテンスが高まる (Wildschut et al., 2006), ポジティブな自己像が活性化する (Vess, Arndt, Routledge, Sedikides, & Wildschut, 2012), 死への恐怖が低減する (Juhl, Routledge, Arndt, Sedikides, & Wildschut, 2011) などの効果がみられることが明らかになっている。これらはほんの一例であり、nostalgia の喚起によって引き起こされるポジティブな効果は他にも数多く存在している。

特性 nostalgia

Nostalgia に関する研究の多くは、nostalgia を実験的に喚起させ、その効果をみるというアプローチを採用している。しかし、日常的に nostalgia をどの程度感じやすいかという特性 nostalgia の観点から検討を行っている研究もいくつか存在している。例えば Routledge, Arndt, Sedikides, & Wildschut (2008) は、特性 nostalgia が高い個人は人生への意味づけを行いやすく、その結果として死への不安が低いことを示している。また、Baldwin et al. (2015) では、特性 nostalgia が高い個人は主観的 well-being が高い傾向にあるという結果が明らかになっている。

特性 nostalgia を測定する尺度のうち多く用いられるものに、Batcho Nostalgia Inventory (以下、BNI とする: Batcho, 1995) と Southampton Nostalgia Scale (以下、SNS とする: Routledge et al., 2008) がある。

BNI とは、Batcho (1995) によって作成された尺度であり、20 の対象 (例: 友達、家族、玩具、実家) に対して日常的にどの程度 nostalgia を感じやすいかをそれぞれ 1 項目で測定するものである。特性 nostalgia の指標としては、20 項目の平均得点が用いられるこ

とが多いが、特定の対象に対する特性 nostalgia を測定する (Hart et al., 2011), あるいは 20 の対象のうち他者を含むもの (例: 家族) と含まないもの (例: 玩具) に分けた上で、それぞれに対する特性 nostalgia を測定する (Abeyta, Routledge, & Juhl, 2015) など、多様な用途が存在している。

しかし、BNI が測定しているのはあくまでそれぞれの対象に対する nostalgia の感じやすさであり、複数の対象にまたがったもの、あるいは特定の対象に還元できないもの (例: 具体的なエピソード) に対する nostalgia を測定することができないという問題がある。

BNI における問題点を補う尺度として、SNS (Routledge et al., 2008) がある。この尺度は、BNI とは異なり、「日頃どの程度 nostalgia を感じやすいか」という抽象的かつ普遍的な特性 nostalgia を測定するものである。SNS は対象にとらわれることなく、「日常における nostalgia の感じやすさ」を幅広く測定することが可能であり、かつ項目数が少なく簡便であることから、Seehusen et al. (2013) や Stephan et al. (2015) など多くの nostalgia 研究で用いられている。また、SNS は高い信頼性と妥当性が確認されており (Routledge et al., 2008), 特性 nostalgia を測定するための尺度として優れているといえるだろう。

本研究の目的

近年、その多様な適応的機能から、nostalgia に関する研究は急激に増加しており、国際比較研究も精力的に行われている (Hepper et al., 2014)。実際に、SNS は原尺度以外にドイツ語版 (Seehusen et al., 2013) や中国語版 (Zhou et al., 2008) など多くの文化において翻訳され、用いられている。さらに、nostalgia が自己に関連する概念であることから、文化的自己観の観点から西洋文化と東洋文化で nostalgia が持つ機能の比較を行う必要性も指摘されている (Baldwin et al., 2015)。

しかし、本邦において nostalgia を扱った研究は非常に乏しく、特性 nostalgia を扱った研究も少ない。本邦においても nostalgia 研究、および nostalgia の国際比較研究を進めていくにあたり、特性 nostalgia を測定する尺度を作成することは極めて重要性が高いと考えられる。

そこで本研究では、特性 nostalgia を測定する尺度である SNS の日本語版を作成することを目的とする。しかし、本研究を実施する際に大きな問題になるのは、nostalgia をどのような日本語で表すかということである。本邦の心理学研究において、nostalgia を表す日本語として扱われているものには大きく「懐かしさ」とカタカナ語の「ノスタルジア」の 2 つがある。

日常的な用語であるためか、「懐かしさ」を心理学

的に定義した研究は見当たらないが、新明解国語辞典（山田他，2011）では「以前の事を思い出して、もう一度会いたいと思う気持ち」、広辞苑（新村，2018）では、「過去のことを思い出して慕わしく思うこと」とされており、辞書的な意味としては「過去を思い出して、それについてあこがれや恋しさなどの肯定的な感情を抱くこと」と解釈することができるだろう。本研究では暫定的にこれを「懐かしさ」の定義とする。「懐かしさ」は概念的特徴において nostalgia との類似性が高く（楠見，2014）、本邦の多くの研究でも nostalgia は懐かしさと同義の概念として用いられている（楠見，2014；楠見・松田・杉森，2009）。

もう1つの邦訳である「ノスタルジア」は、nostalgia の定義である “a sentimental longing for one’s past” を直訳した「個人の過去に対する感傷的な思慕」として定義されている（長峯・外山，2016a）。この概念も「懐かしさ」と同様に、nostalgia と類似した概念的特徴を持つことが明らかになっている（長峯・外山，2016a）。「ノスタルジア」の定義は学術的なものであるため、実際に研究を行う際には補足的な説明が同時に提示される。「ノスタルジア」を概念的に定義した長峯・外山（2016a）では「ある過去の出来事に対して思いを馳せ、感傷的（センチメンタル）な気持ちになること」を用いていたが、教示のわかりやすさを考慮し、その後の研究では「ある過去の出来事を懐かしく感じ、感傷的（センチメンタル）な気持ちになること」という説明が用いられるようになっていく（長峯・外山，2016b；長峯・外山，2018）。

このように、nostalgia の邦訳については2つの立場があるが、本研究では以下の2つの理由から「ノスタルジア」を採用することとした。

1つ目の理由は、「懐かしさ」と「ノスタルジア」に関する差異である。上述したように、これらはいずれも nostalgia と類似した概念ではあるが、両者には違いがみられることも分かっている。まず「懐かしさ」は nostalgia と比べて快の要素が強く、不快の要素が弱いことが明らかになっている（菅原他，2017）。また、nostalgia との関連が指摘されている（Baldwin et al., 2015）アンビバレント（両面的）な感情（例：しみりとした、ほろ苦い）が懐かしさ喚起時には経験されにくい（長峯，2016）ことや、nostalgia が喚起されることによって自己連続性が高まるという結果（Sedikides, Wildschut, Routledge, & Arndt, 2015）が、懐かしさ喚起時には示されない（津村，2015，研究1）ことなど、「懐かしさ」は nostalgia と概念的なズレがあることも示唆されている。この概念的なズレについて津上（2009）は、感性史の観点から「懐かしさ」は nostalgia と比べて「感傷的」な要素に欠けていることを指摘している。

一方で「ノスタルジア」は、nostalgia を特徴づける

アンビバレントな感情と関連する（長峯，2016）とともに、トリガー（刺激）となる記憶の特徴が nostalgia のものと類似し、ポジティブな要素とネガティブな要素の割合も同程度である（長峯・外山，2016b）ことが示されている。さらに、先行研究（Baldwin et al., 2015）では、nostalgia が持つ多様な適応的機能の中でも特に本来性（自己の内的な側面への意識・理解：Kernis, 2003）の向上が最も重要であると指摘されているが、長峯・外山（2018）では、この本来性の向上が「ノスタルジア」の喚起によって生じることが複数の実験から示されている。したがって、「ノスタルジア」は「懐かしさ」よりも nostalgia と概念的に近い可能性が考えられる。

2つ目の理由は、言語的な問題である。ジーニアス英和辞典（南出，2014）、ロングマン英和辞典（リーチ他，2007）、ウィズダム英和辞典（井上・赤野，2012）などの複数の辞書において、nostalgia の日本語訳は「郷愁」や「ノスタルジア」として表記されているものの、「懐かしさ」とは訳されていない。一方で、オーレックス和英辞典（野村・ムーア・カノ，2016）、ジーニアス和英辞典（南出・中邑，2011）、ウィズダム和英辞典（小西・岸野，2012）など複数の和英辞典では「懐かしさ（懐かしい）」を英訳する際に nostalgia や nostalgic を使うケースもあるものの、“yearn”，“good old”，“familiar”，“dear” など、複数の表現が存在することが明らかになっているが、「ノスタルジア」を英訳するときはほぼ nostalgia で一貫している。本研究の目的は海外版の尺度の邦訳であるため、辞書的な意味での齟齬が生じる可能性が少ない「ノスタルジア」を用いる方が適切であると考えられる。

以上を踏まえて、本研究では「ノスタルジア」を nostalgia の訳語とし、3つの研究を行う。まず研究1では、SNS の項目を邦訳したうえで因子構造を確認し、内的整合性を検証する。仮に原版と同じく単因子構造が得られるならば、構成概念妥当性（Messick, 1995）における構造的な側面の証拠が得られると考えられる。また、4週間程度の期間を空けた際の再検査信頼性についても検証を行う。SNS が作成された研究（Routledge et al., 2008）では再検査信頼性の検討を行っていないが、特性 nostalgia を測定する BNI を作成した Batcho（1995）では、ノスタルジアを感じる対象が具体的であれば再検査信頼性は高い（例：玩具， $r = .81$ ）が、曖昧である場合には低くなる（例：あの頃の人々， $r = .57$ ）ことが示されている。本研究で日本語版を作成する SNS も曖昧かつ全般的な対象に関する特性 nostalgia を測定するものであるため、.50 から .70 程度（中程度）の再検査信頼性係数（ r ）が得られると想定する。

研究2では、SNS 日本語版の因子構造および内的

整合性がどの年代においても同様に確認されるかという一般化可能性の側面の証拠について検証する。

研究 3 では、外的な側面の証拠に関する検証を行う。外的な変数としては、先行研究において SNS やその他の特性 *nostalgia* との関連が検討されており、ノスタルジアの概念的特徴に関わる重要な要因 (Sedikides et al., 2004; Wildschut et al., 2006) である孤独感、自尊感情ならびに時間的連続性を取り上げる。孤独感に関しては、孤独感が *nostalgia* のトリガーとなり (Wildschut et al., 2006)、孤独感を感じていると *nostalgia* もまた感じやすくなることから、SNS と小程度の正の相関があることが確認されている (Zhou et al., 2008)。自尊感情に関しては、自尊感情の高さと *nostalgia* への志向性とは関連がないことから、SNS とは無相関であることが確認されている (Routledge et al., 2008)。また時間的連続性に関しては、厳密には SNS を用いた研究ではないものの、抽象的な対象についての特性 *nostalgia* を反映した項目との間に小から中程度の正の相関があることが確認されている (Iyer & Jetten, 2011)。これは、日常的に *nostalgia* を感じやすい個人は時間的連続性を高く知覚しやすい (Sedikides et al., 2015) ためである。これらのことから、SNS 日本語版も先行研究と同様、時間的連続性とは小から中程度の正の相関、孤独感とは小程度の正の相関がみられ、自尊感情とは有意な相関がみられないことが予測される。

さらに、これらの変数に加えて過去への態度についても併せて測定する。過去への態度と SNS の関連を直接的に検討した研究は存在しないものの、*nostalgia* が過去に対する受容的な認知、否定的な認知の双方を含むという結果 (Hepper et al., 2012; Wildschut et al., 2006) から、過去への受容的な態度、否定的な態度のいずれに関しても SNS 日本語版と正の相関がみられると予測される。この点については探索的に検討するが、*nostalgia* が状況による影響を受けやすい概念である (Wildschut et al., 2006) ことや、曖昧な対象についての特性 *nostalgia* は安定性がそこまで高くないこと (Batcho, 1995) を考慮し、いずれも小から中程度の相関がみられると想定する。

本研究では、*nostalgia* が青年期において重要な役割を持つこと (Davis, 1979; Sedikides et al., 2004; Wildschut et al., 2006) および SNS が主に大学生を対象とした研究で用いられている (Stephan et al., 2015) ことから、研究 1 および研究 3 では大学生を主な対象として調査を行うこととする。

研究 1

目的

研究 1 の目的は、SNS の日本語版を作成し、その

因子構造、内的整合性を検証することである。

方法

調査参加者および手続き 関東圏内に在住する大学生を対象として授業の後に質問紙調査を行った。有効回答者 221 名 (男性 129 名、女性 92 名、平均年齢 19.16 ± 1.17 歳) を分析対象とした。このうち、99 名 (男性 63 名、女性 36 名、平均年齢 18.39 ± 1.36 歳) については 4 週間後に再び同じ質問紙へ回答を求めた。

倫理的配慮 本研究は、筑波大学に設置された研究倫理委員会の承認を得て行われた。調査を行う前には、回答は統計的に処理され、個人が特定される形で公表・発表が行われることがないこと、回答は授業の成績と一切関係がないこと、調査への回答は任意であり、回答しないことによる不利益は一切生じないことなどを紙面に明記するとともに、口頭で説明を行った。そのうえで、調査への協力に同意した者のみを調査対象者とした。4 週間後の調査に関しても、同様の手続きをとった。

SNS 日本語版 SNS の原著者である Routledge から翻訳権を得たうえで、日本語版の作成を行った。まず、著者と心理学を専門とする大学教員 1 名が内容の翻訳を行った。その後、日本語を母語とする、翻訳者とは異なる 5 名が英語の項目と日本語の項目の意味内容が同一であることを確認した。続けて、日本語を母語とするが、ネイティブと同様の英語能力を有する研究者 1 名がバックトランスレーションを行った。最後に、原著者である Routledge にバックトランスレーション後の項目と SNS の項目の内容が同一であるという確認を得たうえで、最終的な項目を SNS 日本語版とした (項目内容は Table 1)。

SNS は全 5 項目から構成され、それぞれに対して 7 件法で尋ねた。項目 1 に関しては、「1: めったに経験しない—7: かなり頻繁に経験する」、項目 2 に関しては、「1: 全くなりがちでない—7: 非常になりがちである」、項目 3 に関しては、「1: めったに思い出さない—7: かなり頻繁に思い出す」、項目 4 に関しては「1: 年に 1,2 回—7: 少なくとも 1 日に 1 回」、項目 5 に関しては「1: 全く重要でない—7: 非常に重要である」のいずれかに○をつけるよう求めた。

また、SNS のすべての項目に「ノスタルジック」という言葉が用いられているが、「ノスタルジア」、「ノスタルジック」という言葉を調査対象者が知らない可能性も考えられたため、項目の提示前にノスタルジアに関する定義的な説明を行った。具体的には、長峯・外山 (2016a) に倣い、ノスタルジアを「個人の過去に対する感傷的な思慕」と定義したうえで、長峯・外山 (2018) と同様に、簡略的な説明 (ある過去の出来事を懐かしく感じ、感傷的 (センチメンタル) な気持ちになること) を付け加えた。そのうえで、「上記の

Table 1
SNS 日本語版の探索的因子分析結果

		<i>M</i>	<i>SD</i>	負荷量
項目 2	あなたはどのくらい、ノスタルジックな気持ちになりがちですか？	3.82	1.50	.94
項目 1	あなたは、どのくらいの頻度でノスタルジアを経験しますか？	3.80	1.53	.93
項目 3	一般的に、あなたはどのくらいの頻度でノスタルジックな経験を思い出しますか？	3.61	1.55	.93
項目 4	具体的に、あなたはどのくらいの頻度でノスタルジックな経験を思い出しますか？	3.42	1.53	.84
項目 5	ノスタルジックな経験を思い出すことは、あなたにとってどのくらい重要ですか？	3.84	1.49	.62
分散説明率 (%)				78.48

説明を踏まえて、次の質問について自分にもっともよくあてはまる数字を○で囲んでください」と教示した。

結果と考察

SNS 日本語版の 5 項目について回答の偏向状況を確認したところ、回答が著しく偏っている項目がなかったため、5 項目すべてを用いて最尤法による探索的因子分析を行った。その結果、固有値の減衰状況 (3.92, 0.57, 0.27…) から単因子構造が妥当であると判断した。いずれの項目も高い負荷量 (.60 以上) を示していたため、全 5 項目を SNS 日本語版とした。各項目の内容と因子負荷量を Table 1 に示す。また、Cronbach の α 係数を算出したところ、十分な値 (.93) が得られたため、高い内的整合性が示されたと判断した。全 5 項目を合成した得点の平均は 18.48 ($SD = 6.71$) であった。

また、4 週間の期間を空けて SNS 日本語版に二度回答した調査対象者 ($N = 99$) に関して両者の相関係数 (Pearson の積率相関係数、以下同様) を算出したところ、 $r = .60$ という値が得られた。

研究 1 の結果、本研究で作成された SNS 日本語版も、原版同様に単因子構造と高い内的整合性が確認された。したがって、構成概念妥当性 (Messick, 1995) における構造的な側面の証拠が確認されたと考えられる。また、一般的な心理特性尺度と比べるとやや低い値ではあるものの、先行研究からの示唆と一致する程度の再検査信頼性も確認された。さらに、除外する必要のある項目が無かったことから、SNS の日本語版と原版における項目の意味内容が同一であることが改めて示された。

研究 2

目的

研究 2 の目的は、研究 1 で作成された SNS 日本語版の因子構造および内的整合性が、大学生以外の年代においても同様に確認されるのかを検証することである。

方法

調査参加者および手続き 楽天リサーチ株式会社 (現在は楽天インサイト) が保有するプールより、20 代から 60 代まで計 200 名の一般成人 (男性 104 名、女性 96 名、平均年齢 44.57 ± 14.23 歳) が調査に参加した。調査の際は、年代ごとの人数が等しくなるように (各 40 人) 設定を行った。各調査対象者に対し、研究 1 で作成した SNS 日本語版に回答するよう求めた。なお、項目に欠測がみられた参加者はいなかった。

倫理的配慮 本研究は研究 1 と同様、筑波大学に設置された研究倫理委員会の承認を得て行われた。調査を行う前には、研究 1 と同様の形で、調査を行う前に倫理的配慮に関する説明を web 画面上で行った。

結果と考察

SNS 日本語版に関して各年代の平均得点を算出したところ、20 代で 17.58 ($SD = 6.43$)、30 代で 16.88 ($SD = 7.48$)、40 代で 15.48 ($SD = 6.54$)、50 代で 16.88 ($SD = 7.50$)、60 代で 14.10 ($SD = 6.16$) という結果になり、20 代の得点が最も高く、60 代の得点が最も低いことが示された。しかし、これらの年代差は統計的に有意ではなかった ($F(4, 195) = 1.65, ns, \eta^2 = .03$)。また、各年代で α 係数を算出したところ、すべての年代で良好な値が確認された (順に、 $\alpha s = .88, .94, .87, .94, .86$)。

次に、各年代で研究 1 と同様の因子構造が確認されるかを検証するために、構造方程式モデリングによる多母集団同時分析を行った。まず、年代間の配置不変性を確認するために、すべての母数が年代間で異なるという制約なしモデルの適合度を算出したところ、おおむね良好な適合度が確認された ($\chi^2(25) = 36.69, ns, GFI = .936, AGFI = .807, CFI = .985, RMSEA = .049$)。続いて、各年代で因子負荷が変わらないという弱測定不変モデルの適合度を算出したところ、同様に良好な適合度が確認された ($\chi^2(45) = 55.90, ns, GFI = .909, AGFI = .848, CFI = .986, RMSEA = .035$)。加えて、因子負荷に加えて観測変数の誤差分散が各年代で等値と

Table 2
研究 3 における各変数の基礎統計量

	α	項目数	range	M	SD
SNS 日本語版	.92	5	5—35	18.76	6.65
時間的連続性	.76	4	4—20	16.11	2.87
孤独感	.77	6	6—24	13.83	3.56
自尊感情	.80	10	10—40	26.83	5.25
過去への否定的態度	.73	5	5—25	11.72	3.59
過去への受容的態度	.82	7	7—35	25.35	5.13

いう強測定不変モデル ($\chi^2(61) = 96.48, p < .01, GFI = .841, AGFI = .804, CFI = .955, RMSEA = .055$), およびすべての母数が各年代で等値というモデル ($\chi^2(65) = 97.71, p < .01, GFI = .839, AGFI = .814, CFI = .959, RMSEA = .051$) についても検討したが、いずれも弱測定不変モデルよりも適合度が悪かった。

これらの適合度に加えて情報量規準 (AIC) の値の比較を行ったところ、4つのモデルの中で弱測定不変モデル (115.895) が最も良好な値を示していたため、これを採用することとした。

続いて、上述した分散分析の結果が因子平均に関しても同様に得られるかを確認するため、多母集団の平均構造分析を行うこととした。先ほど採用した弱測定不変モデルを基に、因子平均と因子分散がともに各年代で等値のモデル (モデル 1)、因子平均のみ各年代で等値のモデル (モデル 2)、因子分散のみ各年代で等値のモデル (モデル 3)、因子平均と因子分散ともに等値制約をかけないモデル (モデル 4) の 4つのモデルを比較したところ、モデル 2 において最も良好な適合度および情報量規準 ($\chi^2(62) = 96.53, p < .01, CFI = .957, RMSEA = .053, AIC = 172.490$) が得られたため、これを採用することとした。

これらの結果から、各年代において SNS 日本語版の因子構造に違いはなく、また因子負荷量も一定であることが示された。このことから、SNS 日本語版は構成概念妥当性 (Messick, 1995) における一般化可能性の側面の証拠を有していると考えられる。加えて、SNS 日本語版の平均値についても、年代間で違いがみられないことが明らかになった。

研究 3

目的

研究 3 の目的は、SNS 日本語版の構成概念妥当性における外的な側面の証拠を検証することである。

方法

調査参加者および手続き 関東圏内に在住する大学生を対象として授業の前後に質問紙調査を行った。有

効回答者 242 名 (男性 144 名、女性 98 名、平均年齢 18.68 ± 1.40 歳) を分析対象とした。

倫理的配慮 本研究は研究 1、2 と同様、筑波大学に設置された研究倫理委員会の承認を得て行われた。そのうえで、研究 1 と同様の倫理的配慮を調査実施前に行った。

質問紙 以下の尺度を用いた。

1. 研究 1 で作成した SNS 日本語版 5 項目 (7 件法) を用いた。
2. 石井 (2015) の時間的連続性尺度のうち、過去と現在の連続性下位尺度 4 項目 (5 件法) を用いた。
3. 豊島・佐藤 (2013) の UCLA 孤独感尺度第 3 版短縮版 6 項目 (4 件法) を用いた。
4. 桜井 (2000) の自尊感情尺度 10 項目 (4 件法) を用いた。
5. 石川 (2013) の過去のとらえ方尺度のうち、否定的態度下位尺度 5 項目、受容的態度下位尺度 7 項目 (いずれも 5 件法) を用いた。

結果と考察

各尺度の基礎統計量を Table 2 に示した。SNS 日本語版とその他の変数との関連について、相関係数を求めたところ、時間的連続性 ($r = .22$ [95% 信頼区間は .10, .34; 以下、同様], $p < .01$), 孤独感 ($r = .16$ [.03, .28], $p < .05$), 過去への否定的態度 ($r = .15$ [.02, .27], $p < .05$), 過去への受容的態度 ($r = .31$ [.19, .42], $p < .01$) とは有意な正の相関を示し、自尊感情とは無相関 ($r = -.11$ [-.23, .02], ns) であった。これらの結果は SNS を用いた先行研究の結果や事前の想定と一致していた。したがって、SNS 日本語版は構成概念妥当性 (Messick, 1995) における外的な側面の証拠を一定程度有していると判断された。

総合的考察

本研究の目的は、特性 nostalgia を測定する尺度である SNS の日本語版を作成し、その信頼性および妥当性を検証することであった。3つの研究を行った結果、SNS 日本語版には一定の信頼性、妥当性がある

ことが明らかになった。また、研究2の結果から、SNS 日本語版の因子構造および内的整合性は年代を問わず安定したものであることも明らかになった。

外的な変数との関連は、いずれも効果量が小さかったが、原版の SNS とそれらの変数との関連の強さは、本研究と同程度であった (Routledge et al., 2008; Zhou et al., 2008)。したがって、特性 nostalgia はそもそも、特定の構成概念との関連がそこまで強くない可能性がある。その理由として、nostalgia が非常に複雑な概念であることが考えられる。Nostalgia に関するプロトタイプ・アプローチ (Hepper et al., 2012) で明らかにされているように、nostalgia は多様な要素を含んでおり、なおかつそれらが複雑に入り混じっている。したがって、他の単一の構成概念で説明することが難しいのかもしれない。

ところで、統計的には有意ではなかったものの、研究2では nostalgia を経験しやすいとされる高齢者に相当する 60 代 (Wildschut et al., 2006) で SNS の得点が最も低かったことが示された。この原因については、東洋と西洋の文化的差異が考えられる。Nostalgia のようなポジティブとネガティブが入り混じった混合感情 (mixed emotion) は、西洋においては若者と高齢者で同程度に経験されやすいものの、東洋において高齢者は若者よりも経験されにくいことが明らかになっている (Zhang, Hershfield, & Fung, 2010)。この理由について Zhang et al. (2010) は、東洋の高齢者は西洋の高齢者よりも感情制御に優れているからであると考察している。同様の結果は他の研究でも得られており、Grossmann, Karasawa, Kan, & Kitayama (2014) は東洋の高齢者が西洋の高齢者よりもネガティブな経験におけるポジティブな要素を見出しやすいことを明らかにしている。本研究の結果は、このような東洋と西洋の高齢者における感情制御の違いによって説明できるのかもしれない。今後は、SNS 日本語版の年代間差におけるこれらの可能性について検討が必要であると考えられるが、統計的に有意な差異が認められたわけではないため、解釈には慎重な議論が求められる。

特性 nostalgia を測定する SNS はその普遍性や簡便さから多くの文化で使用されている。そのため、SNS の原版と同一の項目内容を再現している SNS 日本語版を用いることで、本邦においても nostalgia の国際比較研究を進めていくことができるだろう。さらに、本邦ではこれまで特性 nostalgia を測定する尺度が存在していなかった。そのため、本邦において nostalgia 研究を行うための基盤という観点からも、SNS 日本語版が作成されたことは十分な意義があるといえる。

しかし、本研究には、構成概念妥当性を網羅的に検討できていないという課題がある。今回は構成概念妥当性 (Messick, 1995) のうち構造的な側面、一般化可能性の側面および外的な側面の証拠を主に検討した

が、他の側面 (例: 結果的側面) も存在する。例えば、結果的側面を検討するのであれば、特性 nostalgia が高い人は実験場面においても nostalgia を感じやすいという結果 (Routledge et al., 2008) が SNS 日本語版を用いても得られるかを検討するというのも 1 つの方法である。したがって、本研究で検討した以外の側面についても検討を重ねることで、SNS 日本語版の構成概念妥当性をより精緻に検証していくことが求められるだろう。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- Abeyta, A. A., Routledge, C., & Juhl, J. (2015). Looking back to move forward: Nostalgia as a psychological resource for promoting relationships goals and overcoming relationship challenges. *Journal of Personality and Social Psychology*, 109, 1029–1044.
- Baldwin, M., Biernat, M., & Landau, M. J. (2015). Remembering the real me: Nostalgia offers a window to the intrinsic self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 108, 128–147.
- Baldwin, M., & Landau, M. J. (2014). Exploring nostalgia's influence on psychological growth. *Self and Identity*, 13, 162–177.
- Batcho, K. I. (1995). Nostalgia: A psychological perspective. *Perceptual and Motor Skills*, 80, 131–143.
- Batcho, K. I. (2013). Nostalgia: Retreat or support in difficult times? *American Journal of Psychology*, 126, 355–367.
- Conway, M. A., & Pleydell-Pearce, C. W. (2000). The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, 107, 261–288.
- Davis, F. (1979). *Yearning for yesterday: A sociology of nostalgia*. New York: Free Press.
- Grossmann, I., Karasawa, M., Kan, C., & Kitayama, S. (2014). A cultural perspective on emotional experiences across life span. *Emotion*, 14, 679–692.
- Hart, C. M., Sedikides, C., Wildschut, T., Arndt, T., Routledge, C., & Vingerhoets, A. J. J. M. (2011). Nostalgic recollections of high and low narcissists. *Journal of Research in Personality*, 45, 238–242.
- Hepper, E. G., Ritchie, T. D., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2012). Odyssey's end: Lay conceptions of nostalgia reflect its original Homeric meaning. *Emotion*, 12, 102–119.
- Hepper, E. G., Wildschut, T., Sedikides, C., Ritchie, T. D., Yung, Y. F., Hansen, N., ... Zhou, X. (2014). Pancultural nostalgia: Prototypical conceptions across cultures. *Emotion*, 14, 733–747.
- 井上 永幸・赤野 一郎 (2012). ウィズダム英和辞典

第 3 版 三省堂

- 石井 僚 (2015). 時間的連続性尺度の作成 青年心理学研究, 27, 39-47.
- 石川 茜恵 (2013). 青年期における過去のとらえ方の構造——過去のとらえ方尺度の作成と妥当性の検討—— 青年心理学研究, 24, 165-182.
- Iyer, A., & Jetten, J. (2011). What's left behind: Identity continuity moderates the effects of nostalgia on well-being and life choices. *Journal of Personality and Social Psychology*, 101, 94-108.
- Juhl, J., Routledge, C., Arndt, J., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2011). Fighting the future with the past: Nostalgia buffers existential threat. *Journal of Research in Personality*, 44, 309-314.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26.
- 小西 友七・岸野 英治 (2012). ウィズダム和英辞典 第 2 版 三省堂
- 楠見 孝 (2014). なつかしさの心理学——記憶と感情, その意義—— 楠見 孝 (編) なつかしさの心理学 (pp. 1-22) 誠信書房
- 楠見 孝・松田 憲・杉森 絵里子 (2009). 広告と消費者心理——単純接触効果による安心感とノスタルジア—— 基礎心理学研究, 28, 142-146.
- リーチ, G・池上 嘉彦・上田 明子・柴田 元幸・長尾 真・山田 進 (2007). ロングマン英和辞典 桐原書店
- Messick, S. (1995). Validity of psychological assessment. *American Psychologist*, 50, 741-749.
- 南出 康世 (2014). ジーニアス英和辞典 第 5 版 大修館書店
- 南出 康世・中邑 光男 (2011). ジーニアス和英辞典 第 3 版 大修館書店
- 長峯 聖人 (2016). 日本におけるノスタルジアの定義に関する一検討——アンビバレントな感情に着目して—— 日本感情心理学会第 24 回大会発表論文集 https://doi.org/10.4092/jsre.24.Supplement_ps01
- 長峯 聖人・外山 美樹 (2016a). 日本人はノスタルジアを経験しうるか?——ノスタルジアの“bittersweet”な側面に着目して—— 感情心理学研究, 24, 22-32.
- 長峯 聖人・外山 美樹 (2016b). ノスタルジックな出来事における過去への認知に関する質的検討 日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会発表論文集, 69.
- 長峯 聖人・外山 美樹 (2018). 本邦におけるノスタルジアの機能的特徴——感傷を伴う懐かしさという観点から—— 筑波大学心理学研究, 56, 21-26.
- 新村 出 (2018). 広辞苑 第 7 版 岩波書店
- 野村 恵造・ムーア, J・カノ, C. (2016). オーレックス和英辞典 第 2 版 旺文社
- Routledge, C., Arndt, J., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2008). A blast from the past: The terror management function of nostalgia. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 132-140.
- Routledge, C., Arndt, J., Wildschut, T., Sedikides, C., Hart, C. M., Juhl, J., ... Schlotz, W. (2011). The past makes the present meaningful: Nostalgia as an existential resource. *Journal of Personality and Social Psychology*, 101, 638-652.
- Rubin, D. C., Rahhal, T. A., & Poon, L. W. (1998). Things learned in early adulthood are remembered best. *Memory & Cognition*, 26, 3-19.
- 桜井 茂男 (2000). ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- Sedikides, C., Wildschut, T., Arndt, J., & Routledge, C. (2008). Nostalgia: Past, present, and future. *Current Directions in Psychological Science*, 17, 304-307.
- Sedikides, C., Wildschut, T., & Baden, D. (2004). Nostalgia: Conceptual issues and existential functions. In J. Greenberg, S. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of experimental existential psychology* (pp. 200-214). New York: Guilford Press.
- Sedikides, C., Wildschut, T., Routledge, C., & Arndt, J. (2015). Nostalgia counteracts self-discontinuity and restores self-continuity. *European Journal of Social Psychology*, 45, 52-61.
- Seehusen, J., Cordaro, F., Wildschut, T., Sedikides, C., Routledge, C., Blackhart, G. C., ... Vingerhoets, A. J. J. M. (2013). Individual differences in nostalgia proneness: The integrating role of the need to belong. *Personality and Individual Differences*, 55, 904-908.
- Stephan, E., Sedikides, C., Wildschut, T., Cheung, W. Y., Routledge, C., & Arndt, J. (2015). Nostalgia-evoked inspiration: Mediating mechanisms and motivational implications. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 41, 1395-1410.
- Stephan, E., Wildschut, T., Sedikides, C., Zhou, X., He, W., Routledge, C., ... Vingerhoets, A. J. J. M. (2014). The mnemonic mover: Nostalgia regulates avoidance and approach motivation. *Emotion*, 14, 545-561.
- 菅原 大地・ティー, E・長峯 聖人・タミルセルヴァン, R・宮川 裕貴・杉江 征 (2017). 混合感情の文化比較——認知的評価理論の観点から—— 日本感情心理学会第 25 回大会発表論文集 https://doi.org/10.4092/jsre.25.Supplement_os11
- 豊島 彩・佐藤 真一 (2013). UCLA 孤独感尺度第 3 版の短縮版の検討——大学生と中高年者における孤独感の関連要因の比較—— 日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集, 425.
- 津上 英輔 (2009). 懐かしさと nostalgia——比較美学から感性史へ—— 美学美術史論集, 18, 140-164.
- 津村 健太 (2015). ノスタルジアが自己連続性に与える影響の検討 一橋社会科学, 7, 43-52.
- Vess, M., Arndt, J., Routledge, C., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2012). Nostalgia as a resource for the self. *Self and Identity*, 11, 273-284.
- Wildschut, T., Sedikides, C., Arndt, J., & Routledge, C. (2006). Nostalgia: Content, triggers, functions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 975-993.
- 山田 忠雄・柴田 武・酒井 憲二・倉持 保男・山田 明雄・上野 善道・笹原 宏之 (2011). 新明解国語辞典 第 7 版 三省堂
- Zhang, X., Hershfield, E. H., & Fung, H. H. (2010). Age differences in poignancy: Cognitive reappraisal as a

- moderator. *Psychology and Aging*, 25, 310–320. 1023–1029.
- Zhou, X., Sedikides, C., Wildschut, T., & Gao, D. G. (2008). Counteracting loneliness: On the restorative function of nostalgia. *Psychological Science*, 19, ——— 2018. 5. 7 受稿, 2019. 5. 11 受理 ———